

琉球大学学術リポジトリ

アスペルガー症候群の子どもの学童期におけるフラッシュバックと自己存在に関する不安 ～発達にとともなう行動の変容と関係性に焦点を当てた支援のあり方～

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター 公開日: 2010-06-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浦崎, 武, Urasaki, Takeshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/17267

アスペルガー症候群の子どもの学童期における フラッシュバックと自己存在に関する不安 ～発達にともなう行動の変容と関係性に焦点を当てた支援のあり方～

浦 崎 武*

A Case Study of Flashback and Anxiety about Identity of a Child with Asperger's Syndrome in the Elementary School Age : What a Supporter Should From the Viewpoint of Developmental Changes of Identity and Relationship with Others

Takeshi URASAKI*

学童期におけるアスペルガー症候群の子どもたちにしばしば見られる現象としてフラッシュバックが挙げられる。そのフラッシュバックには自己存在に関する不安が伴うケースが多くある。筆者は他者との関わりや学校という現実のなかで自分自身の存在を定位する課題に直面するあるひとりの子どもと関わりをもってきた。その子どもの幼児期から小学校高学年までの他者との関わりの様子や保育園や学校における対応を振り返り、さらに現在の筆者との関わり様子を記述することを通して、その時々が生じてきた発達にともなう行動の変容と支援の経過を整理した。そして現在の症状として生じているフラッシュバックと自己存在に関する不安に対応する支援のあり方について考えた。アスペルガー症候群の抱える他者理解の上での分からなさや支援する重要な他者の必要性、重要な他者の存在を通して自己を確認していくプロセスの必要性が示された。また、フラッシュバックの現象やそれにとともなう不安の背景には自己存在基盤の脆弱性が見られ、「この日がすぐに来る」、「今と思っているとすぐに明日になる」、「今日もすぐに明日が変わってしまう」等、移り変わっていく今という時間への意識や自己存在の基盤としての自己の歴史性の形成についてもより詳細な検討が必要であることが示唆された。

I. はじめに

Williams,D (1992) が報告した高機能自閉症者としての自伝の原題はNobody Nowhere、『誰もいない、どこにもいない』であり、Williams,D (1992) が『名前も、居場所も、身体もない』という感覚をもって生きてきたことを象徴したタイトルである。また、その後、高機能自閉症者のGerland,G. (1997) が報告した自伝の原題、Pretending to be Normal『普通であるふりをして』、またアスペルガー症候群のWilley,A (1999) が報告した自伝の原題、Real Person『人格の真実』、藤家寛子 (2004) の手記『他の誰かになりたかった』等には「私」という自

己意識の揺らぎを象徴するタイトルが付けられている。

彼らの自伝は「何が本当の自分なのか」、自分は「普通であるふりをしている」とアイデンティティの獲得のための自分探しの物語を書き綴っているようである。

浦崎 (2002) は「名前、身長、親が違う」と信じて疑わない自己存在基盤の脆弱性による自己同一性の課題を有する成人のアスペルガー症候群の事例を報告した。浦崎 (2002) が報告した事例では学童期におけるいじめ体験が対人関係を避ける大きな要因や社会性の形成の困難性を引き起こし、自己同一性の獲得に大きな影響を与えた。また、杉山

* Faculty of Education, Univ. of the Ryukyus

(2009)は強烈なトラウマを抱えることにより、その体験のみならず脅かされる他者の存在そのものが引き金となり強度行動障害にたどりつくとして述べている。以上のようにアスペルガー症候群の発達過程のなかで生じるいじめ等の体験はフラッシュバックされ、不安を生み出し他者への恐怖感をより大きく膨らませ、社会へ足を踏み出すことへの抵抗感を増幅させていく。

自己が芽生える幼児期には重要な他者の存在と他者との関わりが重要である。特に人間の発達において母親の存在はアタッチメントの対象となり、その後の人格を形成していく大きな基点となるものである。また、学童期に入ると、学校生活を通して、乳幼児期のアタッチメントを基盤にさらなる重要な他者との関係性を形成し生活空間を拡げていくのであり、家庭以外で関わりのもてる仲間の存在が必要となる。その仲間との関わりを通して生活の幅を拡げ、自己意識としての「私」というアイデンティティを形成していく。

アスペルガー症候群の子どもを含めた自閉症スペクトラム児のアタッチメントの研究は児童期前期くらいまでが中心で、その後の心理的な近接関係の維持・回復としての表象的近接、つまり自他の心的状態の理解やそのやりとりが絡む表象レベルのアタッチメントについてふれるものは極めて少ないのが現状である(遠藤, 2009)。「心の理論」の成立といっても課題の成否の観点からのものであり、現実としての他者のこころの読み取りは相当に難しい課題である。型にはまった他者理解や他者との関わりは、適切な仲間との関係でトラブルを招くことがあり、いじめ等の問題へと発展することが多く見られる。学童期の他者との関わりに対する課題は他者との共有の物事への意味づけを難しくさせ、結果として物事への自分なりの意味づけを強くする。その課題の解決策を自分なりの意味づけで非現実的な方向へと進めてしまうようになる。

筆者は他者との関わりや学校という現実のなかで自分自身の存在を定位する課題に直面するあるひとりの子どもと関わりをもってきた。その事例の幼児期から小学校高学年までの関わりや学校の対応を振り返り、さらに現在の筆者との関わりの様子を記述することを通して、その時々が生じてきた発達にともなう行動の変容と支援の経過を整理し、現在の症状として生じているフラッシュバックと自己存在に関する不安に対応する支援のあり方について考えてみたい。

II. 方法

対象について家族構成、乳児期、幼児期の3歳までは保護者や保育士からの面接による情報である。3歳以降からはA男の関係者からの情報以外に、筆者が直接見たり関わったりした上での情報も含まれている。筆者は4歳から本児と関わるようになった。

A男の状態の変容および保育園、学校の支援のあり方の変化に応じて、3つの時期区分に分ける。本男の特徴が表れる乳幼児期の特徴および支援を第1期、心の理論の成立に至る年齢といわれる時期として学童期前期(小学校1年から小学校3年)の特徴および支援を第2期、心の理論を通過するといわれる時期として学童期後期(小学校4年から小学校6年)の特徴および支援を第3期とする。第3期の小学校6年生においては筆者がA男の支援を行っているプレイルームでの実際のプレイセラピーと親面接の記録を記述する。ここでは月2回のセッションのなかで4月から1月までの特徴的なセッションのエピソードを記述する。

1. 対象

対象児は現在、小学校6年生の男児(以後、A男)である。新築の家がなじみず祖父母の家で過ごしている。特別支援学級に籍を置いているが学校に行けない日が増えてきた。人の目を気にすることが少しずつ増えて学校でも外でも手やかごで顔を隠すようになる。お気に入りの若い女性のタレントがいて、その人のことを思い浮かべてはニヤニヤとファンタジーの世界に浸っている。時々、調子が崩れると1年前の担任との外傷体験を思い出して興奮し落ち着きなくなる。動きも以前と比べ変わったようでゴリラのようにふらふらとがに股で歩く。

2. 家族構成

家族構成は、父、母、姉(中3)、A男(小6)の4人家族である。朝は、父親に小学校まで送ってもらい登校する。放課後は自宅より学校に近いところにある父方の祖父母の住む家に帰宅して過ごし、仕事が終わった父親とともに自宅に帰宅する。育ちの過程においてどちらかと言うと父親の方が母性的な役割を果たしてきたが、最近では父親への反抗的言動が増えて、母親への関わりのある方も変化が見られるようになった。小4の頃は祖父や祖母をからかい怒らせ、その怒った顔を見て笑うようになった。小6では家を新築したが新しい家になじめずひとり祖

父母の家で生活している。

3. 診断と心理検査

小学校3年生の時、精神科クリニックでアスペルガー症候群として診断され、WISC-III 知能検査を施行する。その結果は以下の通りであり、能力の偏りが見られた。

全検査IQ 74、言語性IQ 77、動作性IQ 76であり、下位検査から個々の能力のアンバランスが見られた。言語性では「算数」が13、「数唱」が15と高い。「類似」が2、「単語」が4、「理解」が4であり得点が低い。動作性では「迷路」が15で高い。「絵画配列」が4、「積木模様」が5、「組み合わせ」が4と低い。

Ⅲ. 経過と小考察

1. 第1期：乳幼児期

1) 乳児期の特徴

A男は周産期、生下時体重3000gで帝王切開で生まれた。首の座り、初歩等身体の発達の遅れは見られなかった。生まれてすぐ大声でよく泣いた。その頃から母親は育てにくさを感じており「気質が激しい子」、と言う印象を持っていた。おっぱいがくわえられないとギャーギャー泣き、怒りが治まらなかった。怒りがおさまらなくなると普通は乳首をほっぺたにチョンチョンと当てると口を開けるけれど、A男は顔を振って絶対にくわえようとしなかった。イライラしてしまいどうにもならなかった。一度機嫌を悪くするとずっと引きずる子どもだった。言葉は少し遅れがあったが大きな遅れではなかった。単語は増えたが表現が単調であり、同じ時期に生まれた子どもが文章的に流暢に表現するようになって、A男は単語を並べたような言葉であり気になったが、単語は教えれば増えていった。

2) 幼児期の特徴

2歳半くらいになって多動傾向が目立つようになった。後ろから他の子どもの背中を押す等怒りっぽさも気になった。3歳では絵本を見ても反応がなく、自分の好きなことばかりやっている。3才児検診では自閉的傾向があると告げられ、専門機関に相談をした方が良いと言われた。A男は祖父と母親のことは嫌い、祖母と父親と姉は大好きだという。特に父親には甘える。父親が庭にタバコを捨てようとしたら、「一緒に捨てたかった」と言い、トイレに行ったら「一緒に行きたかった」と言った。A男が知ら

ない間に父親がいなくなると「A男ちゃんも行きたかった」と言って騒いだ。母親は怒るから嫌いだという。エレベーターに乗った時、知らない人がボタンを押すと「A男ちゃんが、(先に)押したかった。」と怒ったり、スーパーでは自分が最初にカゴをとらないと気がすまないなどの行動が見られた。また、家に入るときは自分が誰よりも先に入ることにこだわった。

外出時は行動範囲も広がりほっておくとすぐに興味のある刺激に目を奪われ、スーパーマーケットへ一緒に買い物に行くと頻繁に行方不明になる時期があった。特に目立ったこだわりは信号機に興味を持ち、車に乗っていても散歩をしていてもキョロキョロと信号を見ていたり、手で信号の形を作り、車の中から上にある信号を見るように手を顔の前方に上げ、前から後ろへと動かしながら見上げた。車に乗っていると信号が気になって話しかけても反応がなかった。

3) 保育園での特徴

保育園に2歳から入ってしばらくたってみんなと同じことができない。呼んでも返事しない、応答できない、独り遊びが多かった。子どもたちと良好な関係を作ることができず、楽しみや興味を他人と共有することはなかった。友だちのおもちゃを取り上げたり、自分の遊んでいるおもちゃを取り上げられると急に叩いたり、罵声をあびせたりした。A男は放っておくといつまでも好きな遊びを続けてしまうことが頻繁に見られ、好きな水遊びや砂遊びを止められたり、気に入らないことがあるとすぐにパニックを起こしてしまった。また、何でも自分が一番になりたいというこだわりがあり誰にも一番の座を譲ることができなかった。

加配の保育士と関係が良くなると小学校への入学に向けて緊張が見られるようになった。本児なり、新しい別の環境に入っていくことを見学を通して感じていたようであった。

4) 保育園における支援方針

保育園ではA男に一人の20代半ばの女性の加配がついて、寄り添うように支援を行っていた。自分が思っているように物事が進まなくなるとパニックになるので、パニックにならないようにできる限り期待に添うように関わっていた。A男は友だちと関わり思うようにいかなくなると、職員室に入ってきた。職員室では園長がパニックを沈めたり、パニックにならないように、A男のお気に入りのぬいぐるみを使って支援を行っていた。母親は仕事を抱えな

がらの育児であり、父方の祖母の家で仕事が終わるまで世話をしてもらっていたため、保育園には父親が迎えに行くことが多かった。園は迎えに来る機会の少ない母親より父親と支援の共通理解を深めた。

筆者は他者との安定した関係性を育て、情緒が乱れることなくやりとりができるように支援を行うことをアドバイスした。園では集団から離れて単独の行動が目立っていたが、一緒に行動してくれる加配保育士とは関係が良くなり、その保育士と行動を共にすると落ち着いた様子が見られた。その保育士は保育園のなかでの重要な他者としてA男に受け入れられた。

落ち着かせたり、なだめたりしながら関わることはものすごいエネルギーを必要とした。パニックの時には興奮して保育士にも手を出すことがあった。他児や保育士に手を出す時にはクールダウンさせた後に、手を出すことはいけないことでありA男が他者に手を出す前にできる対応を保育士とともに考えた。パニックを起こすと周りの子どもたちも怖がっ

てしまう悪循環が生じていた。できる限りパニックになる前に対応することを心がけ、A男の様子から前兆が推測できる場合は情緒を落ち着かせるためお気に入りの物や安心できる場を有効に使った。

6歳になると地域の子どもたちは幼稚園へ通っていたが、幼稚園よりも保育園の方に通うことになった。その理由としてA男と良い関係を築いてきた保育士との関わり、保育園のきめ細かい支援体制、配慮、蓄積された対応のかたちがあること、机に座り取り組みをする集団生活に入るにはまだ早く、不適応を起こす可能性が高いこと、そして本人や保育士が友だちとの関係が芽生え、生き生きと活動できる保育園での現状の継続を望んだということが挙げられた。そして、担当保育士がA男と行動をとともにしてA男に関わっていた。幼稚園卒園時には筆者も入り小学校の教頭も交えて入学する小学校との引き継ぎを行った。

乳幼児期の本児の特徴的行動を表1に示す。

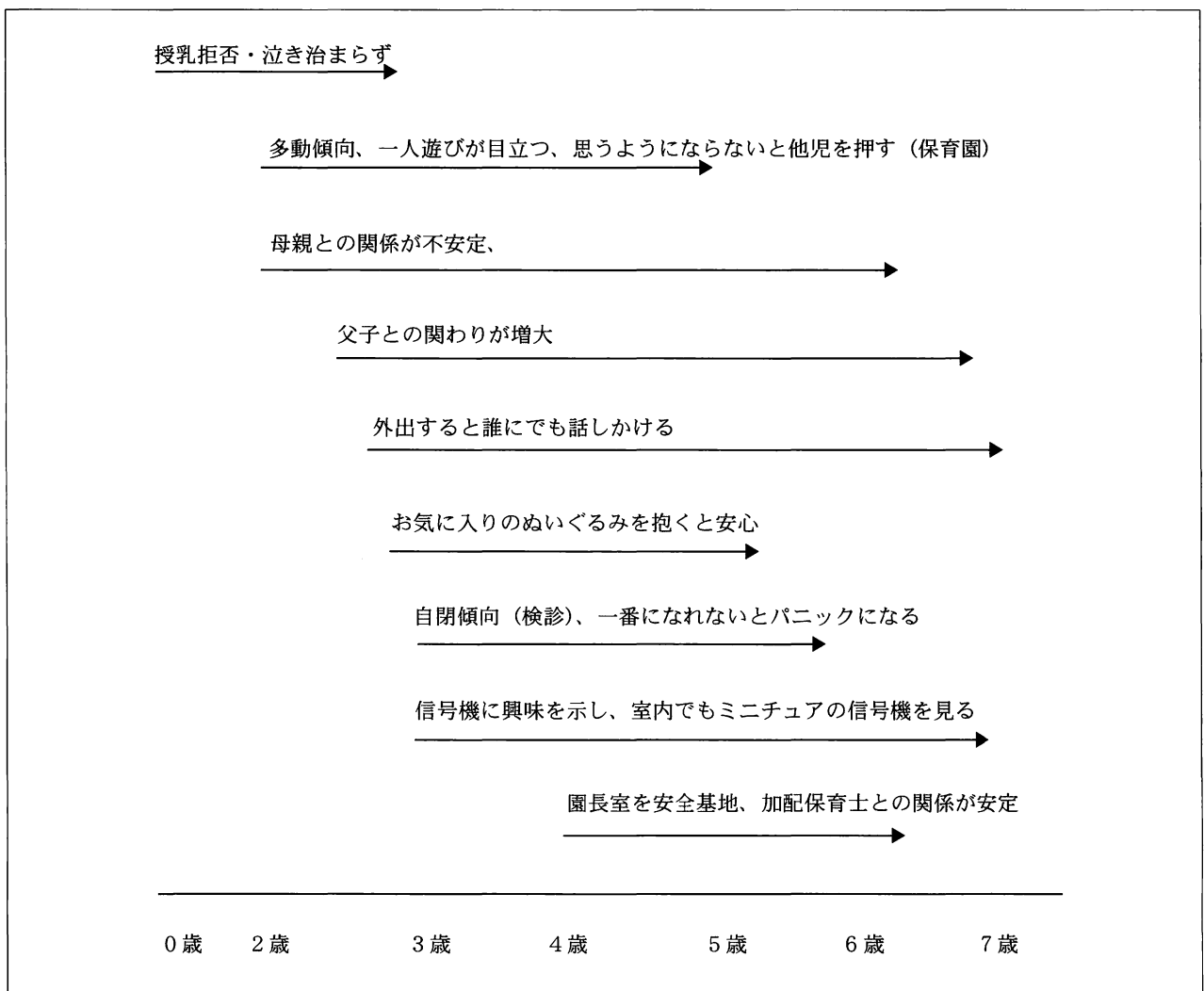


表1 乳幼児期の本児の特徴的行動

5) 第1期の小考察

母子との相互作用がうまくいかない様子が早期の段階からみられる。授乳にともなう情緒の相互作用、安定した関係が築けなかった。母親よりも先に父親への接近が増えたことから母親との愛着形成が上手くいっていなかったことが考えられた。母親の対応に抵抗を示して父親と一緒に行動することを求めることが目立つようになる。母親の子どもの授乳拒否等早期の段階で子育てへのストレスを感じていたことが想定され、その結果、感情や欲求の読み取りの的確さとしての洞察性が翻弄されてしまったことによる影響も母子の関係性の躓きの一要因として考えられた。

父子関係による「一緒にしたかった」という発言が見られるようになる頃から学校や園以外での行動も活発になり誰にでも話しかけたり、スーパーへ行くと目を離すといなくなる等行動範囲も広がりを見せ、気になる行動が増えるようになった。何事でも1番でないといけないというように社会に対して自分を位置付けることにより社会と自分との関係に秩序を作ったり、信号機へ興味をもつようになり、その世界に入るにより自分自身の安定した心地よい感覚を得ていたように思われた。

園ではひとり遊びから次第に他者への接近行動が見られるようになったが集団行動を求められるとパニックを起こすことが見られた。筆者を交えた保育園の話合いのなかで、まずは加配についた担当保育士との二者の関係を築き深めることを確認した。情緒の安定をはかることを優先し、お気に入りのぬいぐるみの持ち込みを許容するとともにA男にとって園長室を安全な場にするのを園全体で決め、支援した。情緒の不安定さを残しながらも周りの子どもとの大きなトラブルは減り、感情を引きずらないようになったと思われた。

担当加配保育士との関係は他の保育士以上に良くなり、園長先生との関わりも増加した。以上のように保育士の工夫と配慮に支えられた他者との関係性や安らげる安全な場は本児の情緒の安定に大きなプラスの影響を与えたと考えた。保育園はできる限り小学校へスムーズに入学できるように段階を踏んで対応した結果、小学校まで散歩をしたりすることが可能となった。小学校への見通しを持たせたこともあり、環境が変わることが意識されたが、意識過剰となり小学校に対する不安も見られるようになった。

2. 第2期：学童期前期（小学校1年生～小学校3年生）

1) 学童期（小1～小3）の特徴

A男が通うM市立M小学校は、児童数、教員数共に県内屈指の大規模校である(平成17年)。クラスは各学年4～5学級あり、自然豊かな学校である。M市は規律を重んじる根強い管理教育の伝統のある地域である。そのなかでもM小学校は特にその伝統が強い。そのため、担任も学校の伝統に基づいて児童たちを学校の枠に入れようとする傾向が見られた。A男の1年の担任は比較的A男の行動に理解を示しており、給食時間中や放課後二人きりになり、A男の為に時間を作ってくれた。放課後は誰もいない教室でA男の話を聞いたり、たまに膝の上のにせたり抱きしめてあげた。

2年の時の担任は絵を描くことが上手で、授業中の課題を解くと提出のためにみんな列に並ぶが、A男は今までは1番でないと並ぼうとしなかった。先生は何番に並んでもお気に入りの絵を描いてあげることを約束すると1番でなくても列に並ぶようになった。担任の先生は課題を提出しにきたA男のリクエストに応じて好きな絵をその場で描いてくれた。それ以降、1番に並ぶことよりも絵を描いてもらいたくて列に並ぶようになった。課題以外の時でも担任が少しでも時間ができるとA男は担任と関わり、好きな絵を要求して描いてもらった。放課後は絵だけではなく、A男が興味を示していた相撲を取ったりした。

3年生になり行動的となり教室を出ていき、戻らないことが増えた。4月頃は友だちと遊ぶ様子も見られたが次第に友だちとの暴言や暴力が増えトラブルが目立つようになった。その時の担任の先生は教員歴が浅く、A男との関係作りが上手くできなかった。また、A男は他の子どもとの成長のギャップや、1,2年生の頃よりも授業内容が難しくなったことなども不適應の要因のひとつとして考えられたが、しかしそのこと以上に、学校の対応の方針が大きな影響を与えたように思われた。担任が対応に手を焼いていたので教頭が厳しく対応をした。A男が廊下に出ると追いかけて教室に戻される様子が頻繁に見られた。また、プールの時間に友だちに手を出して怪我をさせてしまい、その行為を一方的にA男の問題と決めつけ、学校と両親との関係が悪化してしまった。それ以降、A男に対する指導はより厳しくなり教室を飛び出してしまう等の行動が厳しく罰せられることが増加した。

A男は魚が大好きで図鑑や大きさなどに興味をもっていた。特に蛙とイルカが好きで図書館に行くと蛙のぬいぐるみを抱いたり、イルカの本を見たりしていた。特にイルカは大好きで、よく絵を描いた。A男は教室にすることができず、授業中はよく学生支援員と絵を描いていた。「死ぬ」ということに強い関心を示すようになったA男は、お気に入りのイルカの絵に吹き出しを作り、そこに言葉を書き込むことを支援員に求めた。イルカに自分を投影するようにイルカになりきるようになった。そのイルカは「死ぬ」と言われたり、「死にたくないよ」と言ったり、支援者から痛がるという気持ちを教えてもらい「痛いよ」と言ったり、イルカが人間に襲われたり、天国に行ったりした時の気持ちを聞いてくることも見られた。

また、蛙を取るために田んぼに入り近所の人に叱られたりすることがたびたびあった。そのような学校外でも問題行動が見られた。学校だけでは対応ができないということで家庭にA男の支援の要請があった。車の鍵の開け閉めを自分がしないと気が済まないこだわりが増えたり、おばけが怖いということをよく言うようになった。戸惑うと身体を横に揺らしたりするようになった。

2) 学童期前期 (小1～小3) の支援方針

筆者が出向き、昨年度からの引き継ぎの話の新担任となる先生、教頭を交えながら行った。保育園で行ってきた支援について筆者からも話をした。A男と加配の先生との情緒が安定して過ごせるよう園生活を築き、配慮や工夫をしながら周りの子どもたちとの関わりのかたちを作ってきたことや小学校へ入るまでに小学校まで散歩をして通学路に慣れさせたり見学のため小学校へ通い、学ぶイメージや学校生活をするための構えを段階的に作ったこと等、その時のA男の状態を含めた情報を伝えながら、ともに小学校へ入るための配慮や工夫を話し合い確認した。そして、小学校ではまず、園から小学校へと生活スタイルが変化する苦手な変化への対応の課題へと最初に直面するA男を想定して、園で重要視してきた情緒的安定の基盤となる担任の先生との関係作りをしながら、環境の変化への適応を支えていく方針を確認した。その支援方針の下、担任の先生は放課後にたつぷりとA男との関わりをもった。A男も緊張した日々を過ごしていたが放課後の時間を楽しみに学校へと通うことができた。筆者は1年の終わりには1年生の担任と2年生の担任がしっかりと引き継ぎを行い、基本的な支援方針の確認を行った。筆者

は関係をしっかりと作り、A男の興味・関心を上手く利用しながら関係を作りながら、1番になるこだわりを、別の興味・関心へと移行させていくA男と担任の関わりの持ち方を支持し、次年度につなげた。

3年生になると行動的になり教室を出ていくことが増え、教室に戻らないなどの行動が増えた。友だちとの関わりが増えると暴言や暴力などのトラブルが生じるようになり若い担任は対応に戸惑った。担任のサポートに入ったのは新しく小学校に赴任された教頭先生であった。教頭は荒れた前任の中学校で厳しく生徒指導をしてきた先生であり、中学校で問題行動が増えないように小学校の段階で厳しく教育するという教育観をもっていた。

筆者はA男の担任が対応するには限界があるとの判断により両親と学校の要望を受け、支援のための学生を3人派遣した。3人は日替わりで支援を行った。支援員は基本的にはA男が教室のなかで困っている時にサポートしてあげる存在として配置された。学校の側では先生の負担軽減を意識しての配置であった。

学生支援員は、A男がお気に入りのイルカの絵に吹き出しを作り、そこに言葉を書き込むことやイルカの気持ちを教えて欲しいという要望に応じて関わり、そしてA男の世界と周囲の環境・対人関係の架け橋になることも支援のねらいとして位置付けた。学習面ではA男は、算数の計算問題や漢字には興味を示し、自らドリルやプリントに取り組むことはあるが、その他の教科には興味を示さず授業に参加することもなかった。しかしテストでは全教科に取り組み、算数のテストでは担任や支援員に答えを確認しながらも100点中、平均して50点を取ることができた。しかし、他の教科に関しては、分からない問題があるとそこで取り組むのをやめていた。

学生支援員配置以降も対応に困惑していた学校は、とも働きの両親に学校へ来て子どもに付き添って欲しいと要望するが、両親は上手く本児と関われない若い担任や学校の理解のあり方に不満を示し両者の関係のもつれが生じていた。

3. 第3期：学童期後期 (小学校4年生～小学校6年生)

1) 学童期後期 (小4～小6) の特徴

4年生ではA男の学年は4学級あり各クラス35名程度、男女比はおおよそ同じであった。1年生の時、関係の良かった担任の先生を両親が再度、担任になってもらうことを学校に要望して実現した。担

任の先生は1年生の時と比べ身体も大きくなり言葉も激しくなっていると対応に戸惑った。関われる友だちができたが、ちょっかいをかけて周囲を困らせるような友だちであったため問題となる行動が増えた。学校生活においては掃除の時も先生が傍にいて丁寧に指示を出せばできるが、全員に向けて一斉に指示を出すと一人だけ他のことに気を取られていて掃除ができなかった。先生はできる限り側にいるように心がけていた。

学生支援員との関係では支援員にもちょっかいをかけたりする様子が見られたが、関わりを求め、甘えててくれることが多くあった。学生支援員の前でよく絵を描くことがあったが血、ナイフ、拳銃等を表現した。

授業中は落ち着きがなく消しゴムを上に向けて遊んで周りの子どもたちの邪魔になったりする等担任に厳しく注意されることが増えた。支援員も担任が求めている行動を説明しようとする、更に怒ってしまうようなことが見られるようになった。先生たちはみんな俺のことが嫌いなんだ」と述べたり、自分のことを「自分勝手」、「イライラが止められない」と述べるようになった。

5年生になると特別支援学級に入る。年配の担任の先生（以後、B先生）との関係がうまくいかずいらいらすることが増えた。落書きやチック症状のような唾を手につけて飛ばす行動が見られた。学校からすぐに家に帰れなくなり時間がかかってしまう等、学校で特徴的な行動が目立つようになる。担任との関係が悪化し、暴言を吐くことが見られるようになった。A男が気に入っているRの帽子を取って投げて逃げ、B先生に怒られて追いかけられたり、畳の上を上履きのままあがって怒られたり等、問題となる行動を起こし、先生に怒られるという悪循環が生じる。野球に興味をもつようになり、インターネットで試合の途中経過を調べては報告する。その話題は共通の話題の時にはA男と関わりが持てる時期もあったが、担任は「Bマン」とA男にからかわれたり、逸脱行動に適切に対応できず、苦しんでいた。

6年になるとB先生に対するフラッシュバックが頻発するようになる。人に見られることの抵抗が強くなり一度学校に来ると家に戻れなくなっていった。学校では籠をかぶって特別支援教室の片隅で横になって過ごすことが見られるようになった。食事もひとりで食べるようになり、お風呂が入れなくなる、夜はフラッシュバックや不安なことを思い出したり、

考えたりして眠れなくなる。大好きな女性タレントのことやお笑い芸人のことを思い浮かべてニタニタとしたり、笑ったりする時間も増えた。その時は不安な時とは異なり表情は明るかった。新しい家に抵抗を示し、祖父母の家で過ごすようになった。詳細についてはプレイルームにおける筆者との関わりにおいて記述する。

2) 学童期後期（小4～小6）の支援方針

小3時の支援員派遣を引継ぐことで、学部学生(4年生)、2人が合わせて週3日支援を行った。小4のA男の担任は1年生のときの比較的關係が良好であった担任が配置され、小3時の担任よりも落ち着いて明確な支援方針を支援に求めた。前年の管理職が窓口になるのではなく担任が学校側の実質的窓口となった。小4時の支援員の行動も小3時の支援員と大幅に変わった。小4の時の担任の具体的方針として①A男が自分だけの専属支援員だと認識すると安心感から行動が大胆になってしまうから教室にいる時には必要以上に関わらずクラス全員の支援員として行動する。②今年は集団行動を重視しA男だけ過剰な特別扱いをしないようにする。③授業中はなるべく内容に関連した勉強を行い、遊びだけで1時間を終わらせることがないようにする。④危険なこと、周囲の子どもたちに対する暴言など許容範囲を超える行動は厳しく注意する。良いことは思い切り褒め、悪いことは厳しく指導する。

支援員はこの方針を生活面での支援とともに学習面での支援においても求められた。しかしA男の対応は学生支援員にとっては容易なことではなく、その存在はA男が担任や学校の対応で生じる不満の口となっていた。支援員はA男の行動の意図を汲み取ろうと必死に関わっていた。

通常学級では適切な教育ができないという理由により小学校5年生になると支援学級に籍を置き、支援員によるサポートはなくなった。新しい担任の先生および学校の管理職の先生はこのままの状態では行けないということを書いて、らくがきをしてでも必ず自分で悪い行為を認めさせ、自分で消すように要求するなどの対応を取るがさらに関係が悪化し、抵抗を示すようになっていった。年度初めは、筆者が毎年出向いてA男の様子や対応についてみんなで話し合いを持っている。その話し合いで対人への抵抗が強い状態があり、帰宅時は人の存在が気になって外へ出られないので、配慮が必要であることを伝え、学校から帰る時は迎えの車を近くまでもっていくように伝えた。これ以上、他者への抵抗が強くなると、

学校へも来られなくなる可能性があること、そうなってしまうとA男は学校どころか社会へも出られなくなってしまうことを伝えた。また、発達障害児についての話しや特別支援教育について説明し、子どもの状態に応じた支援教育をお願いした。

小6になると特別支援教育に経験と感心のある先生が担任となる。筆者は年度始めに新しい担任、教頭を交えた情報交換のため学校へ出向く。担任は障害児教育の経験者であり、A男の理解に努めながら支援を丁寧と考えて接している印象を受けた。一方、学校長は人目を気にするあまり下校できないA男に対して遅くまで学校に残って対応せざるを得ない担任の状況を危惧して、担任が勤務時間を延長して対応するようなことがないように親がどうかA男を連れて帰るべきだと怒りを露わにした。また、年度初めに行っている校長、教頭を交えた話し合いの場では苛立ちを表現しスムーズに家に帰れないA男のことや思うように協力してくれない両親をどうか

して欲しいと要望してきた。

しかし担任の先生はそのような学校の管理職の対応とは異なる特別な支援教育を徹底して行った。A男の好きなタレントのKの写真をプリントアウトしたり、興味のあるパソコンの授業を率先して行った。人に見られることに抵抗を示して資料室の隅で籠やダンボールで顔を隠して横になっていても、その状態を受け止めて読み聞かせの授業を行っていた。また、特別支援学級で非常勤の支援員として支援を行っている退職教員は横になったり、顔を隠したりする特別な行動を修正することこそ教育だと考えており、特別な行動に対して厳しく指導したがその支援員が来る日は学校を休むようになった。

A男の不安が高くなったことより11月にクリニックを訪れ、気持ちを落ち着かせる薬を出してもらい、一時期の不安の高さは軽減した。

学童期の本児の特徴的行動を表2に示す。

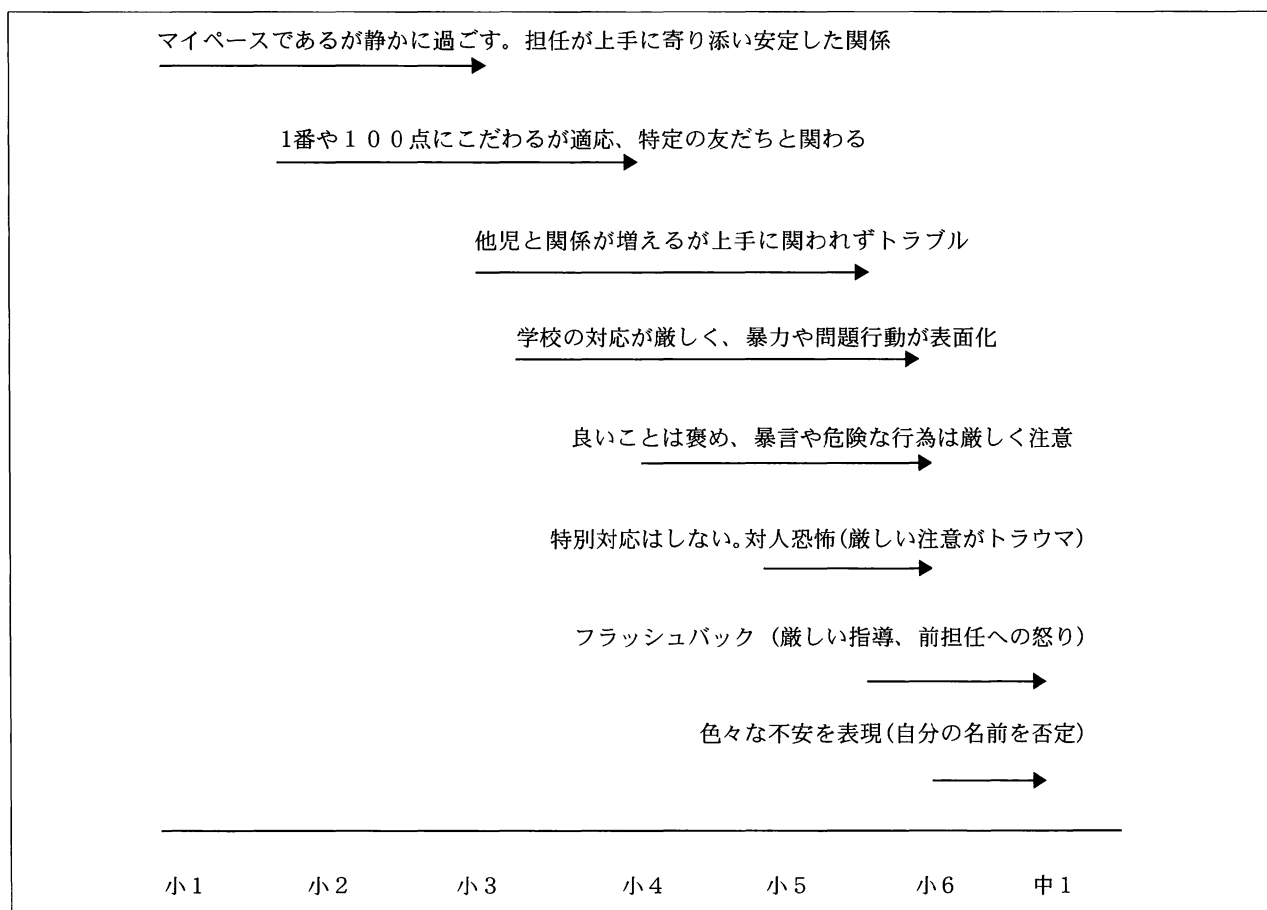


表2 学童期の本児の特徴的行動

4. 第2期、第3期の学童期の小考察

1、2年の先生の放課後や休み時間に本児と関わる時間を作る配慮や放課後の膝の上で座らせて安心感を与えたり、興味や関心に沿って絵を描いてあげ

たり、関わりの工夫が本児の学校の居心地の良さを作った。その配慮や工夫は本児の適応を支えた。1、2年の担任の関わりは、本児のリクエストに応えながら絵を描くなど本児に寄り添いながらの支援であっ

た。その姿勢により本児は安定を保つことができた。1, 2年における教育は1人ひとりにおける教育的にニーズに応じた教育を行っていたといえる。3年生になると本児の行動が活発化し特定の子どもたちとの関わりが見られるようになったが、関係性によるトラブルが増え学校での様子に変化が生じるようになった。学校側は、トラブルの発端となる本児の行動や教室を出ていく逸脱行動で困っていた。本児を理解する努力をかけたままでも本児に厳しい対応をしたことが子どもと先生との関係性を悪化させ負の循環に陥れてしまったと考えられる。さらに両親と学校との関係も悪化することになった。

そのようななか本児はイルカにのめり込み、支援員と絵を使ったやりとりをすることに興味をもった。描いたイルカの絵に吹き出しを作り、そこに言葉を書き込むことを支援員に求めたことはイルカに自分を投影し、支援員という他者との関係性を支えに感情を扱う世界に入っていったように考えられた。

小学3年生以降、校長、担任、支援員の支援のあり方の変化がA男の行動に影響を与えたと考えられた。本児にとって学校での支援の在り方は、本児の状態に大きな影響を与えたと考えられた。小学校4, 5年生は本児に対して明確な特別な対応はしないという支援方針をもち、良いことは褒め、暴言や危険な行為は厳しく注意する対応を行った。6年生になると5年生の担任との関わりがトラウマとなってしまったり、自分の名前を変えようとする等の自己についての不安が生じるようになった。

5. 学童期後期（小学校6年生）のプレイルームにおける筆者との関わりを通じた特徴

セッションにおけるエピソードを記述し、それを表3に整理した。表では行動の特徴に応じて「特徴的行動」、「過去・現在・未来に関する不安」、「興味・関心の対象・事項」3つの項目に分け、さらに「過去・現在・未来に関する不安」を「現在・自己」、過去や未来を想起した不安として「過去・未来」に分け、「興味・関心の対象・事項」を「人」、「物事」に分けた。

4月26日

駐車場から人の目を避けるように走ってくる。遅れて両親が入ってくる。プレイルームに入る前に待合室に走り込む。しばらくたってからプレイルームに入ってソファに横になり、カバーに潜り込む。

「(タレントの) 福田萌 (以下、H)、知っている

か」と聞いてくる。〈知らない〉と返す。「知らないのか、何だそれ」と言う。〈知らなかったな〉、「どういう子が知っているのか」と聞いてくるが、そこで話が変わり、「かすが (お笑い芸人のオードリー春日、以後、D)」、「あっ、D君・・・」と独り言に切り替わりボソボソと話す。

〈一緒に話そうよ〉と誘い、〈1番好きな芸能人は〉と聞いてみると「片岡あゆみ (以後、K)」と言う。ネットで情報を共有しようとする「言わないでいい」と言って、熊本県出身、身長153cmとKの知っている情報を教えてくれる。〈体重は〉「50キロ、〈血液型は〉「知っている、B型」と返してくる。

5月3日

部屋に入るやいなや、ソファのカバーに潜り込んでいる。その中からタレントのHとKが好きだと言う。先回と同様にKの話をする。頭がいつぱいの様子。しばらく、すると「(お笑い芸人の) D君としゃべっている」、「へっ、へっ、へっ」と笑い、D君の持ちネタを思い出して、自ら真似たりしながら笑っている。「Kはかわいいか」とThに聞いてくる。〈かわいい〉と返すと満足そうにしている。

6月7日

いつものように階段からものすごい勢いで走ってきて待合室に入る。駐車場から相談室まで誰にも見られないように、深々と帽子をかぶり顔を隠しながら走りこんでくる。待合室に入ったA男を筆者 (以後、Th) はプレイルームで待っている。A男は、いつものように待合室で少し間をとって、プレイルームに入ってくるとソファの上に走り込んできて、ソファカバーで身体を隠し独りごとを言う。最初に「はずかしいな」、「はずかしいな」と言っているのに対して恥ずかしがっているのかと思ったが、恥ずかしさをThに示しているわけではない。「K、かわいいな」と2, 3度繰り返す。その時の彼の頭のなかには彼女のことでいつぱいのものであった。Thがたびたび、ネットで新しい写真を開くと、その時だけは立ち上がり見に来る。

Thがノートパソコンを開いてみる。最近では直接的なやりとりが減り、どうにか接点を作ることが第一の目的である。Kを検索し、そこから写真を開くと、その時に限りソファのカバーのなかから出て、目を左腕で隠しながらそっとThの方へ歩いてくる。腕の隙間からKの写真を見て、「かわいいな」と呟

く。1分程、立つとテーブルの上に置かれたノートパソコンを覗き込み、すぐにソファのカバーのなかに潜り込む。

「今、ここにいるけど、すぐさ、この日がすぐにたつ。時間がたつ」、「今とっているとすぐに明日になるな」と呟く。Thがどのようなことか意味が分からないまま考えていると・・・「Kに似ている人いるかな」と言う。話を膨らませるために「Kに似ている人かな」とThがその言っていることをなぞる。

その時、「〇〇」と人の名前を言うが声が小さく早口なため、うまく聞き取れず「何と聞いたの」と聞き返すと「・・・何で2回聞き返すのか」と苛立ちを示す。「かわってないな」、「あいつと一緒に、〇〇先生と・・・」とぶつぶつ小さな声で言う。しばらく、頭までソファカバーを被ったままじっとしている。

「Kがかわいい」と言い続けている。学校で先生にインターネットからプリントアウトしてもらった写真をもっているが、布団に潜り込んで見ているのでクシャクシャになっているが、大事にプレイルームに持ち込んでいる。

親面接より

学校では友だちと関わりがもてるようになってきた。教室に閉じこもりきりであったのが、トイレへ行ったりするようになった。しかし多くの時間は箱で顔を隠している。

6月28日

昨年のB先生のことが気になる。腹が立っている。母親に文章で書くとよいと進められて言いたいことを書いている。「俺のことを追いかけてきたりする」、「畳の上を上履きのままあがったら怒られた」などと昨年の出来事を思い出して腹を立てている。先生が怒って追いかけてきたのはA男がお気に入りのR君の帽子を投げて逃げたからである。怒られたことが悔しい。電話や住所を知りたい。連絡を取って話したい。

親から

5年生の子と叩き合いになって机を倒して、担任のO先生に注意され腹を立てていて、2日間、先生のことばかり思い出して腹を立てている。それがきっかけとなり、昨年、B先生に廊下に出されて鍵をかけたことを思い出して腹を立てている。

7月5日

今日は待合室にいつものように入らずに、スムーズにプレイルームに入ってくる。顔を隠さずに入ってくるがソファに腰掛けるとカバーで顔を覆い隠す。そして、すぐに「俺、新しい学校へ行くことが気になる」、「不安なのだよ、次の(担任の)先生が気になる」、「どうしても気になるのだね」、「・・・気になっている」。

「Kを見たい、どうしよう」<ネットで見てみる?>「どうしようかな。恥ずかしいな」「Kの身長153cm、身長小さいと思うか。似ている人いるかな。完璧っていうぐらいに似ている人があると思う」<いるかな>「どうかな」<いたら、どうする>「いたら、かわいいと思う」とそっくりな人と会いたいと言う。

「(漫画家、タレントの)浜田プリトニーって知っている」彼女のことも気になっているようである。時々、「おい、(お笑い芸人の)D・・・」<今、Dって言った?>と聞き返すと、「Dって行ってしまった」、Dのことを口に出さないようにと親に言われているようで、つい、口に出してしまったことに気づく。

そして、次の不安を話す。「Rのことを知ってもらいたい。今の先生たちに。Rのことを今の先生が知らないということが気になる」急に、初めて、「俺って、どういう俺で良かったのか。男が良かったのか、女が良かったのか」と話す。そして「東京都に行く。後、十何日かな」、<ディズニーランド行くの>、「つまらないかな」とやりとりしていると、話の途中に再びKの話に入る。「(東京で)見たらどうする」と気になり出す。<どうする>、びっくりするでしょう、<びっくりするな>、「すぐ浦崎先生に連絡する」

「今日も、すぐに明日に変わってしまうな。明日も休みだもんな。参観日は行かなかったもんな」と先日言っていたことを今日も口にする。「昨日はO先生の誕生日」と話が飛ぶ。

Sはソファに横になりカバーを頭まで覆っている。そして、しばらくじっとしていた後に急に笑い出す。思い出し笑い。<今、笑ったなー>、「そーだ、H君のこと・・・」、Y教頭先生に「R君という子が昨年にいたことを話した」と教えた。しばらくして、思い出して、Kはどうなった。<はずかしいでしょう>「そーだけど、どうしよう」、「吉田絵里という人、知っている」と聞いてくる。話の合間に、外から聞こえてくる救急車のサイレンの音や車のクラクションの音に反応し、「救急車」

とか「今、聞いた」とThに確認する。

親から

＜先生のことを考えることがある？＞と尋ねると「はい」と応えるとすぐに、話が飛んで「(来年)自分が卒業した後に入ってくる子が自分のことを知らない」ということが気になると言う。

学校からすぐに出てこれられないので帰るまで時間がかかる。「はずかしいから出てこれない」と言う。父親が迎えに行き出てこれられない理由を聞くと「廊下に出ると(廊下でO先生に)追いかけてられたことを思い出す」と言う。最近、お迎えに行くと1時間程、毎回待たされる。

7月19日

顔を手で覆いながら相談室に入ってきた。すぐになかには入らずに、待合室に入って、その後、トイレに入ってから相談室へ入る。ソファに飛び乗って横になり、カバーでいつものように全身を包む。「俺、電話したいんだよ」、「話したいことがあるんだよ」と言う。前回からの続きだと考えて＜O先生のこと＞と聞くと「そうだ」と応える。腹が立っている。＜O先生のこと＞それを相手に伝えたいのだよ。電話したいのだよ。発散したい。どうしたらいいのかわかる。「それをしたらお母さんは犯罪だ」と言うけど、俺は電話がしたい。「番号知らないし・・・」

その話をしていると少し興奮するが、そこで「高校野球とか、すもうも始まったね。琴欧州と把瑠都がやる。どっちが勝つか」と話が切り替わる。「Kが好き」、「関西にもいるけどな(かわいい子が)、知っている」、＜知らないな＞、「知らないって言った？(野球アスリートタレントの)吉田えり」と今日は恥ずかしがらずにずっと口に出す。しばらく黙って空想している様子。独り言で「かわいいな」とソファカバーを頭まで被って言う。話題は女の子だけではなく、切り替わる。「森野雅彦(プロ野球選手)」、「知っている」＜知っているよ、ドラゴンズの・・・＞、「知っているのかよ」という表情で「年は分かる？」＜知らない＞、「30歳、AB型」、次は「井端は」、「荒木」と年、生まれた町、血液型をそれぞれの選手ごとに聞いてくる。野球選手やスポーツ選手には興味がある。特に年や生まれた地名、血液型等に関心をもっている。

時々、待合室にいるお父さんとお母さんのところへ行って、しばらくすると戻ってくる。電話をしたい。＜何を話したい＞「どうして、そこまで話すのか(必要があるのか)」と聞いてくる。

親から

腹が立つことがあると夜中にお父さんを起こして話をする。夏休みに入る前の4日間、学校を休んだ。一緒にご飯を食べず自分の部屋で食べている。朝はパンを食べて、昼は食べずダラダラしている。夜も食事は少ない。特に機嫌をそこねると食べなくなってしまう。一番最後にお風呂に入る。毎日、夜は2、3時まで起きていて本人もストレスがたまると言っている。

8月8日

待合室に飛び込んでくる。今までには見られない帽子を深々と被り顔を隠しながらプレイルームへ入る。しばらく待ち合い室から出てこない。しばらくしてThのいるプレイルームに入ってくると「不安なのだよ」と話し始める。「誰が先生になるか心配」、「(去年の卒業生)Rと会いたい」と思っていた。「先生(Th)とあまり話せないな。今はそう思わない」、「あかん、お母さんに話してからでないと話せない」とThにずっと話せないと言う。＜誰が(来年の担任の)先生になるか心配＞と話を戻すと「自分をその先生に知ってもらいたい」とずっと言葉がでた。

前回から気になっていた昨年度の担任B先生の学校に電話をしたとのこと「電話したのだけど」＜誰に＞「俺、B先生の言い方が気に入らないのだけど」とぶつぶつと言っている。しばらく、ソファカバーを被りながら話をしている。「嫌なことが俺にはあったのだ」と何度も繰り返す。

時々、ニタニタと笑っている。お気に入りの「D」とぼそっと言いながらお笑い芸人のDの顔を思い浮かべては笑っている。「7月28日午前3時、Y市で火災が起きたんだって」と不安そうに言う。

親面接

ディズニーランドへ行くことになっていて、そのディズニーランドへ行く前にB先生に電話をかけてスッキリさせたいと言っていた。

9月26日

先日、23日は父親の都合が悪く、母親が相談室につれてくることになっていたが、母親とは2、3日前に関係を崩して母親と一緒に来ることを嫌がり休んだ。それで26日に来ることになった。

玄関に入ると逃げるように待合室に入る。遅れて両親が入る。しばらく、間があり待合室では「K」、「K」というお気に入りのKの名を叫ぶ声が聞こえてくる。2、3分してからThのいるプレイルーム

に入ってくる。いつものようにソファに横になった。そこでも「K、K」と小声であるがThに聞こえるほどの大きさで叫んでいる。しばらくそのまま横になっている。顔を隠すためにかぶっていた帽子をソファの下に落とし、ソファカバーで顔を隠している。顔が見えない。起きてくることはなくじっとしている。時間が来るまで横になっていた。

11月22日

A男と呼ぶと「俺はH」、「あいつのことだよ」と言い返す。ソファのカバーを頭からかぶって横になり「K、かわいい」、「チュッ、チュッ」とキスをしたと言う。「あの世界にはKがいる」、「あの世界にはKがいるという不安があるんだよ」と言う。〈Hって誰〉と聞き返すと「・・・」〈(名前が)どこで、どう変わったの〉「昔からH」と言う。「もうひとり(H)は太っているのだ(母親には入れ替わったと言っている)」、「この世界にいるときはH、あの世界のKは名前が違う」と言う。

12月13日

A男としてはThに話したいことがあり家から出たいのだけど、お風呂に入っていないことが気になってしまい、どうしても出られずに来室を断念する。

12月29日

新居に引っ越すことに抵抗を示しており「おばあちゃんの家に行かしてくれないのだよな」、「もっと、良い親にならないかな」と嘆いている。

「不安があるんだ」、「Kちゃん、かわいいだろう」、「ともかく、不安がある」、〈どういう不安がある?〉「・・・」、「今日もお風呂に入らずにきた」、「今年も終わるな」とかと言っている。

「KとDにあったことあるよ。クイズ番組で。何回も」と話したかと思うと急に、「へっ・・・へっ・・・D、とうす・・・一番はKが好きだな」〈2番は〉「D」〈Dは男だけど〉「Dは興味あるな」〈どこがいいの〉と色々話を繋げようとすると話題が変わり「・・・あの世のことが気になる。夢のような世界になる。どうにかしてくれるかな。夢のような世界をどうにかしてくれるかな」、「あの世に早く行きたい」と言い、あの世の事が気になっている。

〈Hとは誰〉、「入れ替わった。A男は情けない名前と思っている。(自分のことを)Hと言っている」、〈情けないのでHと思っているんだ〉、〈どうして〉、「わからん。俺の名前はHだと言ってる」その

理由を尋ねると声と顔がA男に似ていると言う。そして、「学校の5年生、同じ支援学級なんだ」と教えてくれた。「今日、ここ(相談室)にすぐこれた」、〈良かったね〉「1日ぐらい、(お風呂に入らなくても)いいんだよ。旅行、行く前は10日以上入ってなかった。その前なんかと・・・」と言いかけたが、「これ以上言うと恥ずかしいのでやめる。匂いがすると恥ずかしい」。

今日は、ここの帰りに家につれて返される。おばあちゃんのところに行くのはダメだと言われている。

〈Hはかっこいいの〉、「Hといういい名前と思う。A男は変な名前だ」、先セッションではA男は休んでいたので、「(今回、俺がここに)来ると思っていたか」とThに聞いてきた。「残念と思ったか」とThに聞くようであったが、すぐに「嫌、残念ではないな」と自分で聞いかけ自分で打ち消した。「学校のO先生のこと、(Thが)この間忘れていたな(O先生の話我突然されて、誰の話をしているのか気付かなかったことを思い出したようである)と先回のセッションのことをしっかりと覚えている。「Bマン(前担任のB先生のことをそのように呼んでいる)は知っているか」、「Bマンに会ったらKのことを話そうかな」と言う。「Kがこういう時はどう言っているの」とA男がお母さんに聞くと、お母さんはKは「こう言っている」と答えてくれる。〈あの世はどうしていききたいの?〉とThが聞くと、「楽だから、(ここは)風呂に入ったり、勉強したりとか、仕事をしたりとかしないといけないんだよ」と答える。Thは嫌なことでもあったのかと思い、〈悪い事でもしたのか〉「そうだ、(俺は)言うことを聞かないのだよ」

話題が変わり、「学校のことが気になっている、2時間目が終わって20分の休み時間の終わりの音楽が気になる」と言う。

親から

A男がとても気にしているので、「担任のO先生に聞いてみたら」とアドバイスしたら、『オリーブの首かざり』と教えてくれた。その曲をととても気に入っている。3学期も聞きたいなと言っているが2学期末の冬休みに入る最後の4、5日は学校を続けて休んだ。

1月9日

今日は直接、プレイルームに入ってくる。直接、入ることは久しぶりである。気になっていることを話し出す。「この世で産まれてこなかったら、ど

	<ul style="list-style-type: none"> ・腹が立つことがあると夜中にお父さんを起こし話をする ・夜、2時、3時まで起きていてストレスがたまると言う ・夏休みの前に4日間休む ・食事を独りで食べるようになった。食事の量が減った 	<ul style="list-style-type: none"> ・Rのことを今の先生が知らないということが気になる ・Y教頭先生にRという子が昨年いたことを話す ・「俺、電話したいのだよ、話したいことがあるのだよ」 ・「腹が立っていることを相手に伝えたいのだよ」 	<ul style="list-style-type: none"> ・（来年）自分が卒業した後に入ってくる子が自分のことを知らないということが気になる ・廊下に出ると（廊下でO先生に）追いかけられたことを思い出す 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京に行く予定があり（東京で）見たらどうすると気になり出す。 ・「（漫画家、タレントの）浜田プリトニーって知っている」 ・「関西にも（かわいい子が）いるけどな。タレントY（野球アスリート）」 ・「D」とぼそっと言いながらお笑い芸人のDの顔を思い浮かべては笑っている 	<ul style="list-style-type: none"> ・お気に入りのプロ野球選手の年、生まれた町、血液型を聞いてくる
8	<ul style="list-style-type: none"> ・帽子を深々と被り顔を隠しプレイルームへ入る 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分をその先生に知ってもらいたい ・（昨年の卒業生）Rと会いたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・来年、誰が先生になるか心配 ・前担任のB先生の言い方が気に入らない（ディズニールランドへ行く前にB先生に電話をかけてスッキリさせたいと母親に言う） ・（前担任のB先生との間で）嫌なことが俺にはあった 	<ul style="list-style-type: none"> ・「D」とぼそっと言いながらお笑い芸人のDの顔を思い浮かべて笑っている 	<ul style="list-style-type: none"> ・7月28日午前3時、Y市で火災が起きたことが気になる
11		<ul style="list-style-type: none"> ・A男と名前を呼ぶと「俺はHだ」と応える。「昔からH」と友人の名前が自分の名前だと言う ・「もうひとり（H）は太っているのだ（母親には入れ替わったと言っている）」 ・「この世界にいるときはH、あの世界のKは名前が違う」 		<ul style="list-style-type: none"> ・「K、かわいい」、と言って「チュッ、チュッ」とソファーカーバーのなかでキスをしたと言う ・「あの世界にはKがいるという不安があるのだよ」 	
12	<ul style="list-style-type: none"> ・お風呂に入っていないことが気になってしまい、どうしても出られずに来室を断念する ・新居に住むことを求める母親に抵抗して「もっと、良い親にならないかな」と嘆いている 	<ul style="list-style-type: none"> ・「今年も終わるな」 ・自分の名前はHに入れ替わった。A男は情けない名前と思っている。（自分のことを）Hと呼ぶ ・「わからん。俺の名前はHだ」と言い、自分でもはっきりと分らないが、声と顔がA男に似ていると思っている 	<ul style="list-style-type: none"> ・あの世のことが気になる。夢のような世界になる ・「夢のような世界をどうにかしてくれるかな」 ・「あの世に早く行きたい」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「タレントのKとDにあったことあるよ。何回もクイズ番組で」 ・「Bマンに会ったらKのことを話そうかな」 	

	<ul style="list-style-type: none"> ・今日もお風呂に入らずに来たことを確認する ・「1日ぐらい、(お風呂に入らなくても)いい」、「旅行、行く前は10日以上入ってなかった」、これ以上言うと匂いがすると恥ずかしいと話を止める ・学校の2時間目が終わって20分の休み時間の終わりの音楽が気になる ・2学期末の冬休みに入る最後の4、5日は学校を続けて休んだ 	<ul style="list-style-type: none"> ・そのHは学校の5年生、同じ支援学級だと教えてくれた ・「Hは良い名前と思う。A男は変な名前だ」 ・「残念と思ったか」とThに聞く、すぐに「いや、残念ではないな」と自分で問いかけ自分で打ち消した ・「俺は言うことを聞かないのだよ」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「あの世に行きたいのは楽だから。この世は風呂に入ったり、勉強したりとか、仕事をしたりとかしないといけないのだよな」 	<ul style="list-style-type: none"> ・A男が「Kがこういう時はどう言っているの」とお母さんに聞くと、お母さんはA男にKは「こう言っている」と答えている 	
1		<ul style="list-style-type: none"> ・「この世で産まれて来なかったら、どうなっていたのか」 ・「結婚しないと産まれないのだろう」 ・「俺の名前はK」と言うと「H(友達の名前)だー、Y(別の友達の名前)だー」と名前を呼び、「どっち(の名前)がいい」と聞いてくる ・「DとK、結婚できると思う？」 ・話中にA男がおならをした「俺はD、Hがおならをしました」 		<ul style="list-style-type: none"> ・「Kちゃんのオチンコをさわったら、いや〜と言うだろうか」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「菊池雄星(プロ野球の来年度のルーキー選手)、知っている？」 ・「ボーンあかんでえ、あかんでえ」と言い、「お祖父さんのことめちゃくちゃしている」と祖父にしている行為と祖父の反応を思い出して笑う

IV. 総合考察

1. 本児の状態の変容および保育園、学校の支援のあり方の変化

第1期の乳幼児期では、授乳に関する情緒的相互作用の躰きを始め、独り遊びへの没入、落ち着きのなさの多動傾向、園や学校における集団への不適応、独自の興味・関心の世界と周囲の子どもたちとの関係の取れなさ、人見知りのない対人への一方的な関わりなど、特徴的な行動が目についたが、幼児期を乗り越えていくことができた。この理由として保育園の先生たちが本児を理解し、ぶれのない一環した配慮ある丁寧な関わりをもつことができたことが大きかったと考えられる。本児を担当した園長、主任、

加配保育士などが重要な他者となって関係性を壊さずに関わることができたことが本児の情緒の安定や発達を支えたと考えられた。

第2期に入ると保育園の時の対応を引き継ぎ小1の時は特に緊張感をもって過ごしていたようであり、3学期になって少しずつ授業中、教室から出ていく行動が見られるようになった。小2になって1番や100点にこだわるようになるがA男なりに授業やテストを秩序づけ自分なりのかたちで適応した。小学1年、2年と心配していた小学校への以降期は、大きなトラブルに発展することはなかった。しかし、小学校3年生になると悪戦苦闘の日々が続き、「死」という言葉が表現されるようになる。2学期頃から不安定になり問題行動が増えた。担任は対応に戸惑

いを示し、これまで担当の先生や担任の先生との関係性のなかで自分の楽しい時間や安らぎの時間を作ってきた本児が、初めて安心して関わりをもてる他者の存在を失ったように思われた。

派遣された学生支援員が来る日を楽しみに待つようになったが、上手に関わりをもてない本児は、学生支援員にべったりと甘えたり、ふざけたり、ちょっかいをかけたりと一方的な関わりを求めた。学生支援員はへとへとであったが、本児としっかりと関係性を形成していく努力をした。その関係性のなかでイルカの絵を描き、そのイルカを通して、イルカの気持ちを学生支援員に教えてもらうようになった。

第3期に入ると4年の担任は1年の時と同じ担任であったが、1年の時と同様に本児の求める行動をすべて受け止めて関係性を形成することは容易ではなくなっていた。小学校5年ではたび重なる気になる行動に対する支援に限界を感じ、学校と親との関わりも悪くなったが、小学校6年の担任になると柔軟な対応に切り替わった。

本児への支援や教育のあり方が各学年、各担任によって定まらなかったこと、親との考えとも共通理解が得られなかったことは、本児のフラッシュバックや自己存在の不安を作り出す一つの要因になったように考えられた。

2. 筆者との関わりに表現されたフラッシュバックと自己存在の不安

筆者との関わりを表3にまとめる。「特徴的行動」として、筆者と会う時も帽子やソファカバーで顔を隠している。不安の高まりと生活のリズムの乱れにより夜も寝られない。食事を独りで食べるようになったり、お風呂に入れなくなったり、対人との関わり減少と生活のリズムの乱れが見られた。その背景には表3の「過去・現在・未来」の項目のエピソードが示すように過去の嫌な体験をフラッシュバックしたり、未来の見通しが見つからない不安があるように考えられた。特にフラッシュバックについては感情を治めることは容易ではないようであり、前担任Bとの関係のなかで生じた嫌な出来事を体験した時の感情が湧いてきて、電話をして話したいなどとその感情の処理に苦しんでいた。不安定な時はB先生の言い方や行動まで細部のことも思い出された。6月の6年生のO先生との関係が良好な時にはO先生に注意されても、その怒りの矛先はフラッシュバックの対象となるB先生に向けられることがあった。このことからA男との関係性のあり方が本児のト

ラウマのフラッシュバックに影響を与えていることが推測された。O先生がA男に注意や指示を出し、過去のB先生との体験へとフラッシュバックすることが見られた(6月)が、O先生との関わり自体が今後の外傷として残ることはなかった。時々、A男がO先生への不満をもらすことはあったが、それは一時的な不満で治まり新たなトラウマへと発展することではなく、良好な関係のある他者に受ける注意や指摘は、フラッシュバックを呼び起こし、過去の外傷を受けた対象へと向けられたことが分かる。

一方、過去への想起以外に、現在の自己存在に関連する未来への不安を語った。「前年の友だちRのことを今の先生に知ってもらいたい」とか、「自分が卒業後に入ってくる子どもに自分のことを知ってもらいたい」など、お気に入りの友人や自分の存在を知ってもらいたいという発言であったが、そのことは知ってもらえたらいいなというレベルではなく、知ってもらえないと落ち着かないという不安のようなものが感じられた。7月に「俺は男で良かったのか、女で良かったのか」と言い、現在の男としての自己存在を問うことを口にしてしたが、11月になりフラッシュバックが軽減してくると、次は現在の自分に対して「俺はHだ」、「この世界にいる時はH、あの世界ではK」などと語り、自分の名前は「情けない名前」、「変な名前」と言うようになった。

12月には「(今回、俺がプレイルームに)来ると思っていたか」、「残念と思ったか」、母親にも「(お気に入りの)Kがこのような時、どう言っているのか」と聞き、母親が「こうやっている」と答える等の行動が見られるようになってきた。1月には「どっちの名前が良い」、「Kちゃんのオチンコを触ったらイヤ〜と言うだろうか」と筆者の気持ちやお気に入りのKちゃんの反応がどう帰ってくるのかを確認してくることが見られた。また、これらの行為は自分が他者の反応や気持ちを確認し理解したい行為とも考えられ、アスペルガー症候群の子どもたちが他者のこころの読み取りの課題へ直面している姿を現しており、その分からなさを支えてくれる他者の存在を彼らが求めていると考えられた。

彼らの他者のこころの読み取りの困難さを援助してくれる他者との関わりがなければ彼ら独自の意味づけによる他者理解により、他者とのトラブルやその外傷によるフラッシュバックが生まれ、さらにその影響は自己存在への不安や躓きへと結びついていくように考えられる。

3. フラッシュバックと自己存在の不安

自己存在の不安として小学校3年生の時に「死ぬ」ということに強い関心を示した。イルカの絵に吹き出しを作り、そこに言葉を書き込むことを支援員に求めた時期であり、イルカに自分を投影するかのようになり、イルカは「死ぬ」と言われたり、「死にたくないよ」と言ったり、支援者から「痛がる」という気持ちを教えてもらい「痛いよ」と言ったり、イルカが人間に襲われたり、天国に行ったりした時の気持ちを聞いてくるやりとりが見られた。支援員との会話で「イルカ、なんて言っているのか書いて」と確認したりする発言から、支援員という他者との関係性を支えにイルカを通して他者の心を読み取ろうとする行為として考えられた。このエピソードから、アスペルガー症候群の抱える分からなさを支える他者の存在の必要性、他者の存在を通して自己を確認していくプロセスの必要性が示唆された。

第3期の小学校4年生、5年生の時の学校の支援方針の転換によりその支える他者が不在となっていったように思われる。小学校4年生の時の特別な支援を行わないという方針を示し、本児の問題行動に対する厳しい対処、対応を取るようになる。その本児への対応は「みんな、俺のことが嫌いなんだ」というような本児の意味づけで受け止められ、結果として自己評価の低下に繋がっていったと考えられた。そこに先生の対応の意味を正確に伝える他者の存在による支援が必要であったと思われる。

他者のこころの読み取りの難しさにより、注意や指導をする他者の意図が伝わらず「嫌われている」という被害感を作り出し、さらに5年生で怒られて追いかけられた体験が絡まりあって、フラッシュバックの現象と自己存在の不安へと繋がっていったように考えられる。心の理論の獲得期を通過していく時期の自己評価の低下や外傷体験は、その後の本児の状態に大きな影響を与えたと考えられる。

本児は小学校6年生になって不安と自己についてはっきりと言葉で表現するようになった。表3からも見てとれるように過去へのフラッシュバックには、私という存在への揺らぎが見られる。声と顔が似ているという自分なりの意味づけをして、上手くいかない「情けない自分の名前」を、他者の名前に変えようとしたり、性別を選ぼうとしたり、「俺はD、Hがおならをしました」と自分を他者と入れ変えたり、また「あの世に行きたい」と別の世界に自分を移動させようとしたりした。このような言動はA男

が、物事が上手くいかない、分からない、満たされないという苦しい状況を乗り越えようともがき苦しんでいる姿として考えられた。

現在と過去が交差するフラッシュバックの減少やそれにとまなう不安の背景には自己存在基盤の脆弱さが見られた。「この日がすぐに来る」、「今と思っているとすぐに明日になる」、「今日もすぐに明日に変わってしまう」等、移り変わっていく「時間への意識」や自己存在の基盤としての自己の歴史性の形成などについても、今後、より詳細な検討が必要とされる。また、自己存在の基盤の揺らぎに対して、どのような支援が必要となるのか、その揺らぎを未然に防ぐためには何をすべきなのかについて、今後、フラッシュバックと自己存在の不安に結びつくプロセスの解明、実践を通じた支援事例の積み上げが必要であると考えられる。

引用文献

- 遠藤利彦(2009) アスペルガー症候群におけるアタッチメント. ミネルヴァ書房. 別冊[発達] アスペルガー症候群の子どもの発達理解と発達援助. 82-97
- 藤家寛子(2004) 他の誰かになりたかった. 花風社
- Gunilla Gerland(1997) A REAL PERSON. London: Souvenir Press. ニキ・リンコ訳(2000): ずっと「普通」になりたかった. 花風社
- Jannik Beyer&Lone Gammeltoft(1998) AUTISM & PLAY. 井上洋平・荒木穂積訳(2008): 自閉症と遊び. クリエイツかもがわ
- Liane Holliday Willey(1999) Pretending to Be Normal Living with Asperger's Syndrome. UK: Jessica Kingsley Publishers Ltd. ニキ・リンコ訳(2002): アスペルガーの人生. 東京書籍
- 杉山登志郎(2009) そだちの臨床 発達精神病理学の新地平. 日本評論社
- 浦崎武(2002) 自己同一性と就労の問題をもつアスペルガー症候群の男性の事例—本当の身体像を求める青年との遊戯面接における関係性の形成とレゴ制作—. ミネルヴァ書房. 発達89. 95-103
- Williams,D(1992) Nobody Nowhere. New York: Avon books,高野万里子訳(1993): 自閉症だったわたしへ. 新潮社